

野 口 彰*: ツヤゴケ科 (Entodontaceae) の 2 属

Synodontella 及び Cymbifoliella に就いて**

Akira NOGUCHI*: Two genera of Entodontaceae, *Synodontella* and *Cymbifoliella* (Musci).

Synodontella 属は 1936 年 Dixon 及び Thériot の兩氏によつて新属とし、設けられた本邦固有のものである。本属に含まれる種には、武蔵野井の頭公園の岩上で、笹岡久彦氏が採集した標本にもとづいて、新種として發表された *S. japonica* Dixon et Ther. 唯 1 種があるだけである。筆者は以前から、本種の分類上の位置に就いて、疑問をもつてきたのであるが、今回その所見を發表したい。

Dixon, Thériot 兩氏が *Synodontella* 属を設けるに當つては、配偶體並に子囊體共にツヤゴケ科 (Entodontaceae) の他属のものとは非常につけはなれたものと考えてか、同科の他属との比較を試みていない。Dixon は、枝葉が丸くついて、平坦でないことを強調している。*Entodon* 属では、葉は通常平坦に附着するが、種によつては丸くつくことも稀でない。又、葉の形に就いても、Dixon は二型性であると記しているが、基準標本にあたつてみると、二型性と云える程はつきりしたものではない。葉細胞も *Entodon* 属の諸種の葉と属を別にする程變つてゐるわけではない。次に蒴齒の性状は、兩氏が本属を作るに當つて、主なりどころにしたと思われ、その性状を Dixon は次のように記している。

“Peristomium simplex, e dentibus fuscis, brevibus, infra oream oriundis, ab basin plus minusve cohaerentibus, inde cruribus valde irregularibus, nunc rimosus, nunc perforatis, hic illic anastomosantibus; -----” Journ. of Bot. (1936): 9

この記載だけを讀むと、*Entodon* 属の種のものとは非常に異つた性状の蒴齒をもつていると思われるのである。然し筆者は基準標本になつてゐる井の頭公園産 (no. 4799) の一部を笹岡久彦氏から寄贈されてゐて、それを調べてみると、これは Dixon の觀察の誤りではないかと思われるに至つた。即ち、蒴齒は内外列になつてゐて、外蒴齒はなるほど短いけれども、*Entodon* 属のものと殆ど變つてゐず、16 枚の齒が割合接近して生え、頂は平滑で二又する傾向が認められる。内蒴齒に就いては、Dixon は存在しないとしているが、標本では薄いけれども立派に存在している。それは基礎膜が殆ど見え、齒突起は線状で外蒴齒よりやや短く、平滑である。然し、内蒴齒には不規則性が

* 大分大學學藝學部生物學教室, Faculty of Liberal Arts, University of Oita, Oita, Japan.

** 文部省科學研究費によつてなされたものである。

現れて (Fig. 1, k), 齒突起に小附屬片がついたり, 齒突起の基部に於て即ち基礎膜にあたるところで破片が不規則にからみ合っている状況が見られることがある。この點が内外蒴齒の觀察の誤りから, 上述の Dixon の記載となつて現れたのではないかと思われるのである。そうしてみると, *Synodontella* 屬を *Entodon* 屬から分ける根據はなくなり, *Synodontella* 屬は *Entodon* 屬の Synonym になる。種としては, *Entodon* 屬に同じ種が見當らぬので, 筆者は次のように整理したい。

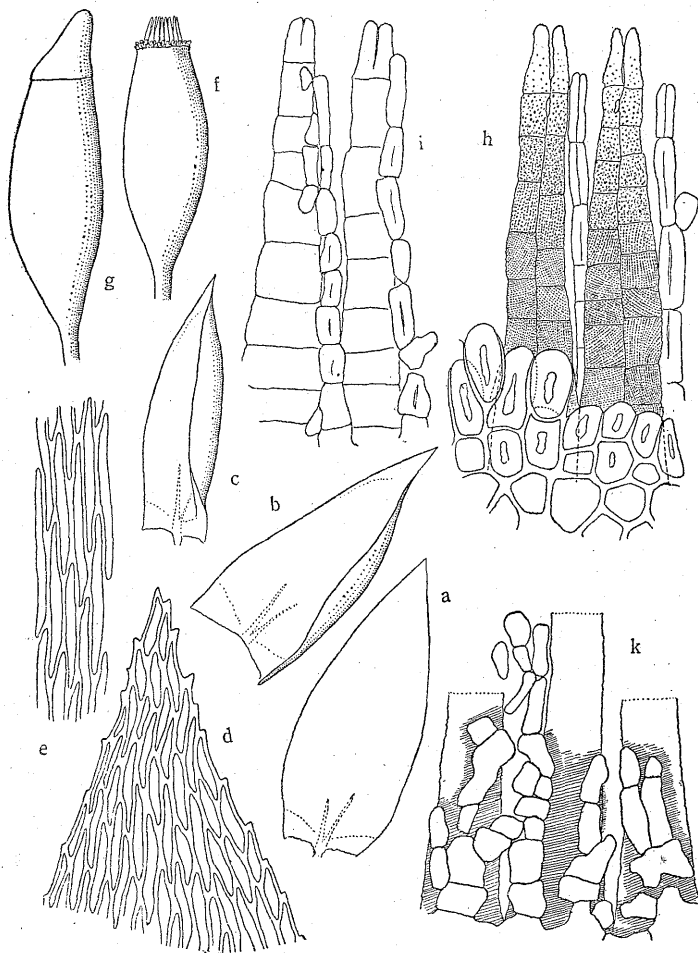


Fig.1. *Entodon japonicus* (Dix. et Ther.) Nog. (typus) a, b. Stem-leaves, ×43. c, Branch-leaf, ×43. d. Apex of leaf, ×294. e. Cells from middle of leaf, ×294. f, g. Capsules, ×28. h, i, k. Peristome teeth, ×294. (h. Outer view, i. Inner view, k. Ditto, showing irregularity of inner teeth).

Entodon japonicus (Dix. et Thér.) Noguchi, comb. nov.

Synodontella japonica Dix. et Thér. in Journ. of Bot. (1936): 9, pl. 610. f. 10
Hab. Honsyu: prov. Musasi, Musasino, Inogasira-park (leg. H. Sasaoka,
no. 4799-typus, no. 4800, March 8, 1929).

Distrib. Endemic to Japan.

尙、筆者は小林義雄博士の御好意によつて、國立科學博物館にある笹岡氏舊藏品を調べてみた。同館にある Cotype の no. 4799 は本種だけであるが、no. 4800 の包みは他の蘚をも交えたものである。

次に *Cymbifoliella* 屬 (Journ. of Bot. (1936): 7) もツヤゴケ科 (Entodontaceae) の 1 新屬として Dixon によつて作られたもので、本邦固有の唯 1 種 *C. Sasaokae* Dix. を含んでいる。その材料は、矢野宗幹氏が仙臺市で採集されたものである。Dixon が *Cymbifoliella* 屬をたてるに當つて強調した性状は、主にその蒴胞の形であつて、彼は“late vel anguste elliptica,” と記し、又、圖にも楕円形のものが描かれてある。この性状によつて、Dixon は本屬をツヤゴケ科のサクライゴケ屬 (*Sakuraia*) に比較して、*Cymbifoliella* 屬の獨立性を強調し、配偶體の性状にはあまり觸れず、又、ツヤゴケ科の他の屬との比較も試みていない。

筆者はかつて、前屬のものと同じく、笹岡久彦氏から基準標本となつた材料の一部を寄贈されていた。その標本の子囊體は、Dixon も記しているように古いもので、蒴帽及び蒴蓋はなく、蒴齒もあつたりなかつたり、あつても上方が折れているので、Dixon の圖 (pl. 610, f. 8 c) のようなものになつたものと思われる。そればかりでなく、蒴胞は壁が白つぽくなつている程に古いもので、従つて標本にした後におしつぶされた形が Dixon の圖になつている。之を水に濕すと長楕円形 (Fig. 2, e~g) になるので、Dixon は壓扁された形のものをみて、類球形の蒴をもつ *Sakuraia* 屬と比較したものとしか思われぬ。筆者所藏の標本は上述のような状態のものであるが、この點を更に確めるために、筆者は小林義雄博士の御好意によつて、國立科學博物館にある Cotype を調べてみると、この標本も當然のことながら、筆者所藏のものと同じもので、又、同じような状態のものである。長楕円形の蒴を有するものはツヤゴケ屬 (*Entodon*) にも多くの種があつて、この點だけで *Cymbifoliella* 屬を設ける根據とはならない。次に Dixon は子囊軸 (columella) の存在を述べているが、これもツヤゴケ屬其の他の屬のものにもあることで、たいして意味がない。Dixon は *Cymbifoliella* 屬を *Sakuraia* 屬のみに比較したから、獨立屬にする結論も生れたのであろう。そうすると、*Cymbifoliella* とされたものはどの屬のものであろうか。*Cymbifoliella Sasaokae* Dixon にされたものの蒴の形は上に述べたようであり、外蒴齒に就いては、Dixon “----- extus et intus alte lamellati, haud striolati, sublaeves;” と記している。この標本は前に述べたように、蒴蓋もとれて、傷んだ蒴胞をもっているものなので、従つて蒴齒の

表面も磨滅して、乳頭なども見えなくなつたものである。然し、よくさがしてみると、割合大きい乳頭が澤山あつて、外面は Dixon の云うように “alte lamellati” ではない。内蒴齒の齒突起は存在し、ツヤゴケ属のものとかわつていない。更に葉のつき方、葉形、葉細胞、中肋等の性狀はツヤゴケ属のものの範疇に入るものなので、*Cymbifoliella* 属はツヤゴケ属 (*Entodon*) の synonym になる。そして *C. Sasaokae* の學名をつけられた蘚は實は、邦内に廣く分布して、普通にある *Entodon Challengeri* Par. に同定されるべきものであることを知つた。

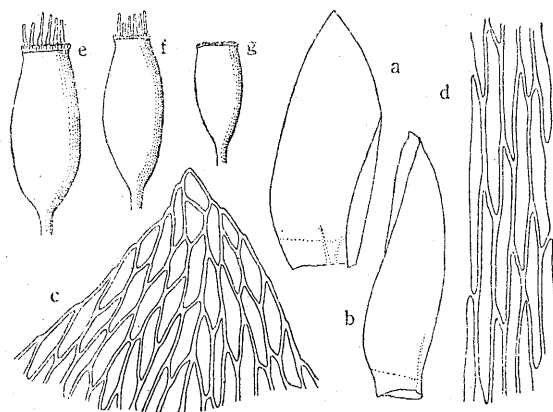


Fig. 2, *Entodon Challengeri* Par. (Typus of *Cymbifoliella Sasaokae* Dix.) a, b, Branch-leaves, $\times 28$. c, Apex of leaf, $\times 264$. d, Cells from middle of leaf, $\times 294$. e, f, g, Old capsules, $\times 13$.

Entodon Challengeri Par.

Cymbifoliella Sasaokae
Dix. in Journ. of Bot.
(1936): 8, pl. 610, f. 8
—syn. nov.

Hab. Honsyu: prov.
Rikuzen, Sendai-city.
(leg M. Yano, not H.
Sasaoka, no. 5225—typus,
May 15, 1920).

因に上に述べた標本の子
囊體の大きさには變異があ
つて、蒴柄の長さは、長い
方で 8mm, 特別に短いも

ので 3mm, 蒴胞の大きさは大きい方で $1.8 \times 0.7\text{mm}$, 特別に小さいもので $1 \times 0.45\text{mm}$ である。

〇ミツスギ産地についての追記 (久内清孝) Kiyotaka HISAUCHI: Additions to the localities of *Lycopodium cernuum*.

本誌 26 卷 8 號にミツスギの産地について一言したが、あの記事中に「内地」とあるは「同地」の誤植である。すなはち鎌倉で見つからないという意味である。其後聞知したところでは府川勝藏氏は本年伊豆宇佐美村の阿原田と峯のあいだで温泉の湧出しない地域で採られた由、この地は相當あたゝかいので、生育して居るものと考へられる。